

<b>Title</b>	開会礼拝：エレミヤー・九一〇/ヨハネニ・一九・ニニ（第二回日韓神学者会議）
<b>Author(s)</b>	左近, 豊
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.55, 2013.3 : 75-81
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4689">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4689</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 開会礼拝

(エレミヤ一・九―一〇／ヨハネ二・一九―二二)

左 近 豊

ここに集ったお一人お一人を、主の御体なる教会に仕える教師として、また牧師として召してくださった神の大いなる御業を覚えて感謝いたします。昨年の三月一日の東日本大震災以来、教会の頭なるキリストにあつて、長老会神学大学校とそれに連なる韓国の諸教会が、献金をもって物心両面にわたつて、そして何よりも祈りをもって霊的に日本の教会を支えてくださったことを心より感謝しています。

日本の教会、そして社会は新たな歩みを始めようとしています。その中にあつて崩壊後を生き延びるためのみ言葉と上よりの知恵を求める切なる祈りを熱くしております。

ある被災地の言葉をご紹介します。これは東北大学大学院の片岡龍准教授が東日本大震災一周年を覚えて雑誌『世界』に「悲しみを抱えて生きる」と題して寄稿した一文の要約です。

……美しかった街が、家族の団らんが、これまで疑うことさえなかった幸せという言葉までが二度と帰らぬ

遠い昔へと失われてしまった。幸せな家はどこも同じようなものだが、不幸せな家はその不幸せの数だけ千差万別、無数の一つ一つ形を異にする悲しき、寂しさがある。もうもとはは戻れない、だから復旧、復興と、いうのはありえない、大きすぎる悲しみを抱えて生きていく外ない。それを象徴するような出来事として、町中泥だらけ、巨大な瓦礫がオブジェのごとく、あちこちで道を遮っていた石巻市の河岸で目に飛び込んだきたのは、「生き残ってしまいました」と殴り書かれたペンキの文字だった。誰に向かって発されたともわからない言葉が、今も遺物のように胸の奥に沈殿し、心を疼かせる<sup>(1)</sup>。

崩壊後の世界に「生き残ってしまいました」、その胸を締め付ける叫びを聞きながら、今日、私たちは預言者エレミヤが神から託された言葉を聞きたいと思います。

エレミヤ書冒頭で、主の言葉がエレミヤに臨んだのは、ユダの王、ヨシヤの治世第一三年、その後ゼデキヤの治世第一一年の終わり、すなわちバビロン捕囚まで続いたとあります。これを西暦に置き換えるならば紀元前六二七年から五八七年までの四〇年間にあたります。ヨシヤ王の時代というのは、比較的安定した時代でした。王朝は揺らぎなく、神殿はヨシヤ王の主導でなされた改革によって整えられ、対外的にも脅威となる勢力はありませんでした。けれどもヨシヤ王の子どもたちが王位に就くころになると情勢は急転直下、変わり始めます。内外から揺さぶられ、国の屋台骨がぐらつき始めます。ついに五八七年に神の都エルサレムは陥落します。聖なる都、神が選んだ永遠の憩いの地と詩篇に歌われた麗しの都は今や見る影もなく、神の聖所、足台、御座とされた神殿は灰塵に帰しました。ダビデ王朝最後の王となつたゼデキヤは捕らえられ、王子たちの処刑を見させられた後に目を潰されて牢につながれ、ここに四〇〇年余り続いたダビデ王朝は終焉を迎えます（エレミヤ書五二章）。その日が来るまでの四〇年間、明日も今日と変わらないはずと信じて生きてきた世界が一変し、気がついたら世界が崩れていた。慣れ親しんでいた社会がもはや取り返しのつか

ない仕方では崩れ落ちてゆく中を生きる人たちに向けて語られた言葉がエレミヤ書に刻まれています。

それは例えば、天地創造の秩序がしだいに混沌へと回帰するものとしても描かれています。エレミヤ書四章二三節から二六節にエレミヤ書の見つめる世界があります（新共同訳）。

わたしは見た。見よ、大地は混沌とし／空には光がなかった。

わたしは見た。見よ、山は揺れ動き／すべての丘は震えていた。

わたしは見た。見よ、人はうせ／空の鳥はことごとく逃げ去っていた。

私は見た。見よ、実り豊かな地は荒れ野に変わり／町町はことごとく、

主の御前に／主の激しい怒りによって打ち倒されていた。

創世記一章の天地創造の過程が、一つ一つ原初の混沌へと巻き戻されてゆくのを「わたしは見た、見よ」と繰り返しながら、畳みかけるように描いています。

ここには生き残った喜びはありませんでした。むしろ愛するものたちと一緒に死んだほうが良かったです、と嘆いた言葉も残っています（哀歌四・九）。エレミヤはその中であって「**抜き、壊し**」そして「**建て、植える**」（一・一〇、三一・二七―三〇）二つの神の壮大なみ業を告げました。エレミヤ書の証しする神が抜き、壊すのは、人の手によって据えられた、かりそめの確かさです。何を抜き、何を壊すかといえば、例えばそれは城壁であったり、砦であったり、堅固な町、城塞都市であったり、聖所であったりします。言い換えれば、私たちの日常を保つのに必要不可欠な安全保障です。

またイスラエルの救いの歴史、出エジプト以来の救済史さえも例外ではなく滅ぼし、破壊されうる。神の名によって

呼ばれる聖なる地も、その地を去る自由を持つておられる神をつなぎとめることはできない。エレミヤ書の証しを聞くものは、あらゆる抛り所を剥ぎ取られていくことに不安を覚えるでしょう。

私たちは知らず知らずのうちに、内なる神殿、内なる城壁を囲い、これまでの歴史にすがろうとします。けれどもエレミヤ書を読む時、私たちの内なる確かさはどれも、生ける神の前に抜き、壊し、滅ぼし、破壊され、崩れざるという事実に向き合う勇気を持つ必要に迫られます。神殿の建物は灰塵に帰す日が来ます。故郷を追われて異郷の地へと移されることを迎えます。救いの歴史も終わりを迎える。

このような神の峻烈な剣のような言葉に刺し貫かれ、内なる深き闇を探り、敗れて目覚め、古き時代の終焉を見据え、新しい時代の到来をはるかに望みながら懊悩する人々の心にエレミヤ書は語りかけているのです。崩壊の極みにあつて初めてまみえる神の言葉があることを知るので。

エレミヤ書の証しする神は「**抜き、壊し、滅ぼし、破壊**」するとともに、「**建て、植える**」神です。絶望のきわみにあつて初めて出会うことのできる神を証しするのです。古き世に終わりを告げ、未だ知られざる新しさを来らせる方であることを証しするのです。旧約聖書では、まず創世記から申命記にかけて、混沌の力と闘つて秩序を創造され、モーセによつて奴隷の家、苦役から民を救いだし、約束の地へと導かれた神との出会いが証しされてきました。その証しと対峙するようにして、このエレミヤ書では、かつてモーセにしたのと同じように、その口に言葉を授け、権威を委ねた預言者によつて（申命記一八・一八）、前半部の一章から二五章で、古い世界の決定的な終わりを告げて「**抜き、壊し、滅ぼし、破壊**」され、後半部の二六章から五二章にかけて、徹底的に新しい世界の始まりを告げ、「**建て、植えられる**」神が証しされているのです。例えば三一章二七節以下をひも解いてみましょう。そこにはこう語られています。

見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家に、人の種と動物の種を蒔く日が来る、と主は言われる。かつて、彼らを抜き、壊し、破壊し、滅ぼし、災いをもたらそうと見張っていたが、今、わたしは彼らを立て、また植えようと思張っている、と主は言われる。

そして続く三一節以下で

見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつて私が彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言つて教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである。

神による大いなる破壊から新しい創造へ、捕囚から解放へ、裁きから救いへ、死から新しい命へと向かうみ業の奥義が証しされ、古い契約から新しい契約へ、それはさらには十字架の死から復活のいのちへと突破してゆくのです。

主イエスは、ご自身の死と復活を「壊し、三日で建て直す」出来事として告げられました。ヨハネによる福音書二・一九節以下は宮清めの直後の出来事として次のように記しています。

イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」それでユダヤ人たちは、「この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか」と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。

教会は、エレミヤ書に語られてきた**抜き、壊し、滅ぼし、破壊する**神のみ業によつて御子主イエスが死に引き渡され、私たちの罪のために徹底的に砕かれたことを知っています。そして同じように**建て、植える**み業によつて、死んで葬られたキリストが三日目に死人の内よりよみがえられ、私たちを救いの歴史に結び付けられたことを信じています。そしてこの方を救い主と仰ぎ、その再び来たり給うを待ち望み、最初のものが過ぎ去つて「**新しい天と新しい地**」**「新しいエルサレム」**がまさに来たりつつあるのを待つヨハネ黙示録の望み見る共同体の希望（ヨハネの黙示録二一・一、二）は、「**新しい契約**」を結ぶ日の喜びを語るエレミヤ書の希望とも響きあうのです。

エレミヤ書は、内に喪失と破れと矛盾、誰にも言えない闇を抱え、滅びの淵にたたずみ、自力ではどうにもできない罪に支配された者に向けて、それでも語りかける神を、「わたしは彼らの嘆きを喜びに変え／彼らを慰め、悲しみに代えて喜び祝わせる」（三二・一三）と言われる神を証しています。私たちの罪を、主イエスキリストにおいて**抜き、壊し、滅ぼし、破壊し**、私たちを、主イエスキリストの復活のいのちに**建て、植えて**くださる神を共に仰ぎつつ、神に栄光を帰する交わりと会議が開かれることを祈ります。

注

(1) 片岡龍「悲しみを抱えて生きる」『世界』二〇二二年四月号(岩波書店)、六六―七二頁。